

|         |                             |                               |
|---------|-----------------------------|-------------------------------|
| 氏名(本籍)  | <small>おおかわら</small><br>大河原 | <small>きよし</small><br>清 (岩手県) |
| 学位の種類   | 博士(教育学)                     |                               |
| 学位記番号   | 博乙第1,021号                   |                               |
| 学位授与年月日 | 平成6年11月30日                  |                               |
| 学位授与の要件 | 学位規則第5条第2項該当                |                               |
| 審査研究科   | 教育学研究科                      |                               |
| 学位論文題目  | 教育における非言語的コミュニケーションの研究      |                               |
| 主査      | 筑波大学教授                      | 長谷川 栄                         |
| 副査      | 筑波大学教授                      | 博士(教育学) 渡辺 光雄                 |
| 副査      | 筑波大学教授                      | 教育学博士 杉原 一昭                   |
| 副査      | 筑波大学教授                      | 医学博士 勝田 茂                     |

## 論 文 の 要 旨

### 1. 構成

論文は、序論、本論6章及び結論より構成され、本文(含資料)325頁、引用文献25頁より成る。

### 2. 目的と方法

教育における非言語的コミュニケーションの研究は、わが国ではまだ本格的に行われていない状況にある。そこで、本研究はこれに真正面から取り組み、主に教師の身体動作の学習者に対する影響を実証的に解明しようとする。

研究目的は、大きく次の二つである。第一は、学習者が教師の身体動作のどこに注目し、どのように捉えているか、この身体動作によってどの程度影響を受けるのかを明らかにすること、第二は、非言語的行動が認知的局面と感情的局面に影響するとして、その影響を両局面の関係から明らかにすることである。このことから、研究課題が七つ導き出される。

研究対象には非言語的媒体としてさまざまなものがあるが、本研究では主に身体動作に焦点を当てる。研究の被調査者・被験者は小学校・中学校・大学の教育場面における学習者である。研究方法は、質問紙による統計調査法と実験法の二つが用いられる。

### 3. 研究結果の概要

本研究の前提として、一つは、教育における非言語的コミュニケーションに関わる諸概念を明らかにすると共に、コミュニケーション・モデルにおける非言語的メッセージの位置づけとその意味把握が考察される。(第1章) もう一つは、非言語的コミュニケーション研究の歴史的レビューが行われると共に、教育における非言語的コミュニケーションの先行研究が検討される。(第2章)

研究課題1は、学習者は身体動作に関心をもっているか、それは友達などの影響を受けているか、を調べることである。小学校4、5年生77名の児童に対する質問紙調査の結果では、50種類のジェスチャーのうち11種類はほとんど全員が知っているものであった。ジェスチャー使用の影響を受けている者は、友達、母親、父親、TV番組などであった。(第3章)

研究課題2は、教師は学習者の身体部位のどの部分に注目するか、を明らかにすることである。小・中・養護学校の教師141名を対象として、質問紙調査が行われた。その結果では、学習者の身体部位のうち「首から上」が全体の68%、「手や指」が24%、「腰から下」が10%、「胸や胴体」が4%であった。学校種別では、小・中学校の教師は学習者の目と口に注目していた。(第3章)

研究課題3は、学習者は教師の身体部位のどの部分に注目するか、また教師の身体動作から何らかの意味を想像しているか、を調べることである。中学校1、2、3年生216名を調べた結果では、学習者の注目している教師の身体部位は「首から上」70%、「腕や手」13%、「腰下」11%、「胴体」7%である。個々には、目、髪、口、手という割合の高い順である。学習者が教師の身体動作から意味を想像する人数の割合は25%である。(第3章)

研究課題4は、授業中の教師の身体動作は学習に影響を及ぼすのか、及ぼすとすれば、その影響が身体動作によることをどのように証明できるか、を明らかにすることである。小学校6年生1クラス39名を対象として、担任教師に例示的動作を伴う物語の朗読をしてもらった実験が行われた。その結果、例示動作の伴う朗読の方がその伴わない朗読に比べてその内容に関するテスト得点が高く、統計的結果からも例示的動作が注目されていることが示された。この実験で用いた行動評価表の検討も行われた。小学校5年生の算数と社会科の授業でそれを使用した結果、行動評価表の信頼性が確認された。また、落語家桂米丸の落語「鶴」と民話の語り手鈴木サツの「笠地蔵」の語りを対象として、例示的動作を分析し、前者では話し方に関わる例示的動作が多く、後者では内容説明に関する例示的動作が多いことが明らかにされた。(第4章)

研究課題5では、学習者が両親の身体動作を知覚することと担任教師の身体動作を知覚することとの間に相関関係があるか、が調べられる。小学校4、5、6年生229名を対象に調査した結果、児童が担任教師について動作を知覚する数と両親について動作を知覚する数との間に高い相関があることがわかった。国語学力別でみると、上位群は相関が高く、両親と教師の動作を区別して見ていることが示された。また、学年別に動作を知覚する数について差があることもわかった。(第5章)

研究課題6は、学習者のタイプによって教師の身体動作に対する学習者の知覚に相違があるか、を調べることである。小学校4、5年生71名を対象に調査した。この結果、知能上位群は動作を通して何らかのイメージを描いているのに対して、知能下位群は動作を通してイメージすることなく、動作を単なる動作として見ていることがわかった。このことから、知能上位群は教師の身体動作から次のような行動をするかを察知していることが示唆される。(第5章)

研究課題7は、身体動作が感情的局面に強い影響を及ぼす際に、これは受け手の認知的局面の解釈に基づくものと考えられるが、このことを実証的に示すことができるか、を調べることである。知らないと好き嫌いの判断ができないと仮定して、刺激語に対する「知っている—知らない」の判断とそ

の時間、そして「好き－嫌い」の判断とその時間を調べる方法をとる。実験結果から、「好き－嫌い」の判断は「知っている－知らない」の判断よりも、判断時間に関して約2.42秒長くかかることがわかった。知らないと好き嫌いの判断ができないことが実証され、知から情への関係の存在が明らかにされた。(第6章)

以上のことから、研究目的1について、学習者は教師の身体部位の目や口に注目していること、教師の身体動作は学習に影響を及ぼしていること、学習者のタイプによって教師の動作を単にとらえる見方と動作を通して意味を想像する見方があることなどが明らかにされた。研究目的2は、認知的局面と感情的局面との関係を反応時間の差として実証的に確認することができたという。

## 審 査 の 要 旨

本論文は、教育の場における非言語的コミュニケーションに着目し、主に身体動作を中心とする非言語的メッセージが学習者にどんな影響を及ぼすのか、を実証的に究明したものである。これまで教育における言語的コミュニケーションの研究は数多く行われてきたが、非言語的コミュニケーションの研究は、理論的なそれは見られるものの、実証的なそれはほとんど行われてこなかった。本論文の研究は、教育における非言語的コミュニケーションについて経験的に知られていることを実証し、その実証的研究の道を切り開く基盤を創る意味において、高く評価することができる。

本論文は、非言語的コミュニケーションに関する理論的吟味と先行研究の検討の上に、研究課題を七つ立てて一つ一つ確実に調査ないし実験をして明らかにしている。教師の身体動作が児童の学習に影響を及ぼしていること、その身体動作が児童のタイプ（知能上位群と下位群）によって知覚の仕方が異なること、認知的判断に基づいて感情的判断をすることを反応時間の差として実証的に確認したことなどは、教育における指導の面で意義をもつとともに、非言語的コミュニケーションの研究の足場を固める上で価値があるということが出来る。

七つの研究課題はそれぞれ着実な研究方法で進められているが、それらの関連づけと全体の理論的考察に不十分さがみられる。しかし、これは今後本研究を発展させて行くならば、その隙間を埋めることができる。また、教育におけるコミュニケーションは言語的なものと非言語的なものとが密接不離であって、非言語的なものを取り出して研究した意義は大きい、これと言語的なものとの結びつきの研究は今後期待される。

よって、著者は博士（教育学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。